

学校検診等をふりかえって

扇 谷 明 典

その一、終戦後間もない頃の「学童検診、要抜去乳歯の抜歯、就学時学童の口腔検診」について

口腔診査が春と共にやって来る。毎年の事ではあるが美唄市内の中小幼の学校の口腔検診が雪どけと共に始まる。面積が400平方キロを占める美唄市内に散在する39校に対し20名程度の美唄市内の在住の美唄歯科医師会々員が4月5月の2ヵ月間毎週1回本日休診でがんばったものである。交通の便の良い所の学校は千人単位の学童数がある。学童数の少ない学校は適当に遠い所にあるので結構なアルバイトであった。

特に1校で3,600名の学童数の全国最大の三井美唄小学校をはじめ炭砒地域にある学校はすべて学童数が多く、低学年はすべて二部授業のため、夕方まで検診が終わらないことも、珍しくなかったものである。

学童数は少数でも石狩川沿岸地区に散在する中小校の場合バス路線の無い頃の為、市役所手配の自動車、しかもトラックである。全会員それに乗せられ、当時は小川小学校と呼んだ上美唄の小学校は全員で検診し、その後は開発、富樫、山形、中美唄、中村等に散在する中小校に学童数に応じ2名から3、4名を下車してもらい検診が終了しても夕刻まではトラックの迎えが来るまで待たされたものである。マイカーを持たない歯科医師が珍しい現在から見たら、「本当ですか?」と、言われそうであるが道路が悪い上にトラックの荷台にゆられての道中である。学校に着く迄に車酔いで車から降りた時はまっ青になって、全然仕事にならない先生も随分いたものであった。検診が終了した後、学校でつり竿を借りて出かけようとする、先生から「帰りの道が分からなくなりますから、余り遠くまで行かないで下さい」と、言われるまでもなく、右を向いても左を見ても山田の案山子よろしく、おそろしくなって遠くまでは行かれるものではなかったし、またあのトラックでは酔うであろうし、と思うと少々大げさであるけれど平重盛の心境を味わうこと度々であった。

その二、要抜去乳歯の抜歯について

現在ではだいぶ前から実施していないけれど、美唄歯科医師会では方面会時代から学童口腔診査の結果、要抜去乳歯の抜歯を、昔はムシ歯予防デー、終戦後は口腔衛生週間の行事の一つとして無料奉仕で実施していた。現在とちがって開発途上時代の美唄沿岸地区の住民の人達は子沢山であり、ふところ不如意の人達が多かったようで、子供の手を借りて

農作業をするのが大部分で農繁期休校が多かったころである時代。中々痛くもない要抜去乳歯の抜歯に通院する事は分かっているが実行に難があった事は事実である。それを学校迄歯科の先生が出張して抜歯を無料奉仕してくれるとのことで、多くの父兄から感謝されたものである。按頭台の無い学童椅子での抜歯はいくら乳歯でも結構な仕事であったし中には本当の難抜歯があったりして当日は夕方になると腰が痛くなること必常のアルバイトであった。しかるにこともあろうに「学校の屋内体操場での抜歯は大変に不衛生である。若し何かあった場合その責任はどうするのか。」という教育委員会からの申し入れを受けた。

感謝されるならともかく、何たることかとの事で歯科医師会の対応を歯会と協議の結果乳歯の抜歯ばかりでなく、学校内での口腔検診も不衛生になることは歯会としても決して良いこととは思わないので、その心配のないすべての点で衛生的な口腔検診室を美唄39校に完備されたしと言う要望書を市教委に提出した上で、何人かの先生は学校歯科医の辞退届を提出したひと幕もあった。今だにその検診室の出来た学校は美唄にはない。

その三、就学時学童の口腔検査について

小学校入学前に病気の有無を調べ、悪い場合には入学迄に治療しておくために入学前に検査をすると言う事は必要である為、全国的に長期間実施されていた。しかるに、昭和45年度になって美唄で一番入学児童が多数と思われる小学校の就学児童口腔検診の日程を、一カ月前から市政便りにも新聞にも案内をし歯会側も特に人数が多い学校の為3名の先生が当日は休診を予定して、患者さんにも休診を知らせてあるのを突然前日になって市教委から明日の検診は延期されたしと、前年に続いて申し入れがあった。学校に問い合わせるとラチが明かないので、教員組合に問い合わせると曰く、入学すれば学童だけれど入学前は学童ではないので学校でその世話を3学期の貴重な一日を人事院勧告も満身に守らない市のためになんて使われなければならないのだと言う言い分である。市教委も教員組合も美唄独特の悪い意味の保守革新を地で行っているとしか言えない。昨年にも同じ事があったので1年間かけて充分協議する様にとの医師会、歯科医師会両会の要望に対して、1年間なにをしていたかと言う以外なものもない。我々も学校歯科医であるので学童でないものは検診する義務はないとでも言い出したらどうなると文句の一つも言いたくなる。終戦後しばらくの炭鉱華やかで12の炭山があった最盛期の人口10万近く数えた頃の学童検診の項を綴って見ながら現在1/3に人口も減り学童数もオール美唄の小学生の合計がかつての三井美唄小1校に満たない現在を思う時、追憶はしみじみと胸にせまるものがある。炭鉱町の開業医を父として生まれ育ち自らも父と同じ開業医として暮らした美唄も今はひとかけらの石炭も出ない事は何にも増して寂しく、つくづく今昔の感にたえない。

学校検診にあたり、学校の数と生徒数がいかに変化していったかを知るために、その記録を記載する。

学 童 人 数 推 移

	昭和30年	昭和40年	昭和50年	昭和60年	平成10年
小 学 校	美 唄 分校	美 唄 分校	中 央	中 央	中 央
	峰 延	峰 延	峰 延	峰 延	峰 延
	沼 南	沼 南	沼 南	光 珠 内 中 央	光 珠 内 中 央
	拓 北	拓 北	拓 北		
	三 井 美 唄	三 井 美 唄	三 井 美 唄	南 美 唄	南 美 唄
	東 明	東 明	東	東	東
	栄	栄	栄	東 栄	東 栄
	我 路				
	沼 東	沼 東			
	旭	旭			
	常 盤	常 盤			
	日 東	日 東			
	茶 志 内	茶 志 内	茶 志 内	茶 志 内	茶 志 内
	茶 志 内 中 央	茶 志 内 中 央	茶 志 内 中 央		
	中 村	中 村	中 村	中 村	
	元 村	元 村			
	富 樫	富 樫			
	上 美 唄	上 美 唄			
	上 美 唄 南	中 美 唄	西 美 唄	西 美 唄	西 美 唄
	開 発	開 発			
		三 井 南 美 唄	三 井 南 美 唄		
	14,043名	7,292名	3,347名	2,997名	1,719名
中 学 校	美 唄	美 唄	美 唄	美 唄	美 唄
	峰 延	峰 延	峰 延	峰 延	峰 延
	沼 南	沼 南	沼 南		
	三 井 美 唄	三 井 美 唄	三 井 美 唄	南 美 唄	南 美 唄
	東 明	東 明	東 明	東	東
	沼 東	沼 東			
	常 盤	常 盤			
	茶 志 内	茶 志 内	茶 志 内	茶 志 内	茶 志 内
	中 村	中 村			
	西 美 唄	西 美 唄	西 美 唄	西 美 唄	西 美 唄
	6,361名	5,385名	1,856名	1,591名	1,001名
幼 稚 園		美 唄	美 唄	中 央	中 央
		三 井	三 井	三 井	三 井
		旭	栄	栄	栄
		栄			
		沼 東			
		581名	457名	271名	151名
合 計	20,404名	13,258名	5,660名	4,859名	2,871名

恒例の旅行会について

大 坪 義 和

記録では、昭和28年から親睦旅行会が行なわれ、現在の様に年2回の一泊旅行会は、昭和38年から始まっています。親睦旅行会について、昭和38年5月25日、午前中学校歯科検診を終了させて、午後から登別へ一泊旅行を行なう。いのちの洗たくも、たまには良いものであるが毎年のことながら、いろいろの都合はあることながら欠席者のいることは淋しい。新年会について昭和41年1月15日には、折からの猛吹雪ではあったが、第1ホテルにおいて新年会を行なう。「1年の計は何とやら」と道歯の国保審査委員の小佐川、久保田両先生にご臨席をお願いして、保険の問題点を講演していただく。(雨田先生記) 上記の様に旅行会は、例年5月の学校歯科検診終了後と1月の新年会を兼ねて開催されています。平成5年5月の旅行会からは、交通の便、時間的制約からすすきのジャスマックプラザに変更になり、平成10年の新年会も第1ホテルの都合によりジャスマックに場所が移っています。楽しい旅行会の様子がみごとに描写されている雨田先生の随筆を掲載します。

小樽銀鱗荘旅行会記

雨 田 実

美唄市内、中・小・幼・学童・園児の春季口腔検診の一段落した5月18、19日、一泊二日で小樽市「銀鱗荘」に親睦旅行会を行なう。といっても、18日は、午前中は学校検診、午後からの小樽行きであるから、結構なアルバイトではある。

それでも、日ごろのミラーもピンセットも忘れて、つかの間でもという希望は、歯科医なら誰でも持っている。まして一年一度の親睦旅行会の当日は新緑の5月、山ほととぎすは聞けざるも、初夏の風物詩たるカッコウの声を聞きながら、ひねもすのたりのたりたる海を眺めながらの旅行ともなれば、大老、老中、若年寄、多士済々たる美唄歯会でも、午前中検診をして来た学童の遠足と似たような、はしゃぎようであった。

5月の海はかれいの季節と、浦島太郎よろしく、リールから特長靴まで持参で張切るものもあれば、小樽は港町だから、夜ともなれば面白いところがたくさんあるから、小樽の夜は私におまかせあれ、何しろ小樽育ちだからと張り切る先生もあれば、まさか年のせいでもあるまいが、小樽は生(いき)の良い魚の料理が楽しみだと、食い気一方の色気拔きの先生もいるから、旅行会はやめられない。

目的地「銀鱗荘」は、桜町平磯岬の丘陵に建ち、昔時、鯨大漁のころ建立した鯨御殿を移築したものとかで、建物こそ古いが、その豪壮さは、さすが往時“鐘一つ売れぬ日は無し江戸の春”と徳川幕府の威勢をうたったのに対して、“江差の五月は江戸にも無い”と

鯨景氣をしのぶにふさわしいものであった。日ごろ一言あってしかるべき美唄歯会の大老諸公も、古き良き時代をしのんでか、手ばなしで喜んでくれたことは、旅行地の選考に苦労した甲斐があったといえる。

夕食の会食ともなれば、海の幸、山の幸の数々に一同舌鼓を打ち、折からの東天に月は昇り、飲むほどに酔うほどに、小樽港の赤い灯、青い灯はまねく。

「春宵一刻価千金」「いや、金じゃ計れない」などとしやれていたら、突然「お今晚は」という声に驚く。

いや、驚いては失礼、飯田大老の招きによって、小樽の清元の名取りという芸者の、三味を持つての到来である。

「おひとついかが」とばかり諸先生につき終りし後、飯田大老自慢の清元「保名」（やすな）を一同拝聴に及ぶ。俺が俺がの飯田大老、俺の清元に合わせる三味をひく芸者は小樽にしかない、とは日ごろの毒舌なるも、確かに三味のばちさばきは大したもの、素人のわれわれにも上手ということは良く分かる。

残念なのは、飯田大老、お年のせいか（おこられるかな）思うように声が出ない。狂歌に「まだ青い素人清元黒（玄）がって赤い顔して黄（奇異）な声出す」を地で行く始末に、美唄歯会一同、落語「寝床」の丁稚の定吉にされてしまうとは。それでもさすがは芸者、さのさから都々逸、はては唐八拳と、御座持ち振りは立派である。

一段落した後に、三々五々と連れ立ち、港小樽の夜の街へと出掛けるもあり、翌朝白々明けに、海釣りでかれいを釣るんだ、彼女を釣るんだと、常になく早寝をするものもあった。

ややあって、飯田大老“清元「保名」は、俺は大正12年以来、今日始めて歌ったよ”には、図々しいことでは人後に落ちない心算でいた小生も、いささか参った。

明くれば五月十九日、早暁の日本海のオゾンを腹いっぱい吸い込んで眺めた石狩の浜、指呼の間に望む増毛連峰、出船、入船の小樽港の俯瞰は、文字通り絶佳、絶景であった。明日からはまた大いにがんばろう。

（昭和43年5月20日記）

美唄三師会史

平 隆 一

1. 美唄三師会の特色

三師会は、各地域にあるが、その役割、特色などは、同じではない。美唄三師会は、純粹に懇親の会である。なんら選挙などの政治には関与せず、麻雀大会（これは、自然消滅したが）、ゴルフ大会そして新年会（年度により忘年会）を兼ねた総会を開くという和やかなものである。

参加資格は、美唄歯科医師会、美唄市医師会、美唄薬剤師会の会員となっている。この3つの会は、性格が異なる。美唄歯科医師会は開業会員から成り立っているが、美唄医師会は、開業会員の他に市立美唄病院や美唄労災病院、個人病院の勤務医から成り立っている。人数としては、勤務会員の方が多数である。薬剤師会は、薬局店主と病院薬剤師から成り立っている。また、美唄の薬局店主と言っても、全道にチェーン展開している巨大なもののオーナーであるとの特殊性がある。

2. 美唄三師会の成立

昭和47年に老人医療費無料化について行政側からの説明が、美唄歯科医師会にあった。このころ、美唄には、人口の割には歯科医師数が少なく、どの歯科医院にも患者が溢れ、多忙を極めていた。このような状態で、老人医療の無料化により、手間と時間のかかる義歯患者が増加することは、全歯科医師の反対するところであった。

昭和53年の夏に、地区医療協議会が、発足することになったため、行政側主導型になることによって、老人医療無料化の轍を踏まないことを大前提として、三師会の地域に於ける団結をより強くすることを目的として、仮称、地区医療協議会、三師会会議を、昭和53年5月26日、市立美唄病院会議室において、開催した。美唄歯会からは、雨田会長、扇谷専務、高橋道歯代議員の三名が出席した。協議会発足を前に、三師会から各一名の幹事の選出には美唄歯会から扇谷専務を、医師会、薬剤師会からも各一名の幹事を選出し、三師会の団結を強固にし、協議会の発足に際して、医療担当者主導型で行く事、従って人員構成に於いては、二者構成また三者構成で有っても、医療担当者側主導に遂行する人員構成には絶対に賛成しない、と言う点を確認して第一回の会合を閉会した。

上記のことが、契機となり、昭和53年12月13日美唄三師会が、南陽軒にて設立総会が、開かれた。このときの議長は小原徳行先生であり、会長は坂田唯祐市立美唄病院長、副会長に雨田 実先生、林 幸男市立美唄病院薬局長、各会から世話役を出すということで、

初代幹事に、耳鼻科開業の前山善弥先生、宝崎錠二先生、中川薬局中川広吉先生が就任。

昭和61年12月より宝崎錠二先生の代わりに小森英世先生が新幹事に、又平成3年には平隆一に交代し現在に至っている。

3. 美唄三師会の変化

親睦が主体の三師会ではあったが、各会から講師を出し、勉強をとの機運がおこり医師会、歯科医師会、薬剤師会が、各年担当とすることになった。

美唄歯科医師会からは、平成3年に大坪先生が、博士号論文のテーマであった「口腔癌」について講演した。平成6年度は歯科医師会担当年度であったが、演者が決まらず、やむなく三師会の歯科医師会幹事であるため、責任上、平がおこなった。平成9年度は、美唄で唯一の小児歯科専門医である前山善彦先生が行なった。先生の亡き父上は、医師会会員であったため、講演の後、医師会側から、この姿を亡き善弥先生が、見られたなら、どんなにか喜ばれたであろうかとの、優しい賞賛の言葉が発せられた。

4. 麻雀大会の成績

麻雀大会は、扇谷先生、山崎先生が参加なさっていた。山崎先生亡き後は、唯一扇谷先生が参加なさった。年々麻雀をする会員の減少により、自然消滅した。

扇谷先生が優勝するなどの輝かしい成績がある。

5. ゴルフ大会

美唄歯科医師会は、ゴルフを行なうのは、宝崎先生、大坪先生、吉村先生、前山先生だけである。しかしながら、強豪の医師会、薬剤師会を相手に、前山先生が優勝するなどの、輝かしい成績がある。

1. 5才並びに3才児健診をかえりみる

前 山 善 彦

1.5歳児歯科健診は、昭和53年度より実施されています。平成9年度に制度化され現在に至っています。

3歳児歯科健診は、昭和56年度より実施され、その時同時にフッ化物塗布事業も実施されて来ました。

1.5歳児及び3歳児歯科健診は、毎年、美唄歯科医師会の全会員の先生方によって毎月1回、年12回行われてきました。

フッ化物塗布事業は、昭和56年度より平成2年度までは、雨田先生と宝崎歯科分院の宝崎史子衛生士さんによって実施されていました。

平成3年度より、歯科医師が交代し、前山が現在まで実施して来ました。

平成4年度より歯科衛生士が星歯科衛生士に交代し、さらに、平成7年度より河合歯科衛生士に交代し平成8年度まで保健所の事業として実施されてきました。

3歳児歯科健診及びフッ化物塗布事業が保健所より市の事業へと移って来ました。それに伴い、平成9年度から市の保健センターに場所を変えて実施しています。フッ化物塗布時にはさらに、歯科衛生士も田中歯科衛生士の増員により2名となりました。

毎月の1.5歳児及び3歳児歯科健診時には、市に委託された歯科衛生士により、平成9年度より、母親及び子供に対して個別にブラッシング指導を行なっています。

平成9年4月～平成10年3月までは田縁ひろみ歯科衛生士が担当し、平成10年4月以降木明順子歯科衛生士が担当し現在に至っています。

フッ化物塗布事業では、昭和56年度より平成3年度までは、イオン導入法を用いて行われてきましたが、平成4年度より現在実施している塗布法に変更しました。平成4年度より歯科医師の健診前に、染め出しブラッシング指導を歯科衛生士及び保健婦により行ってきました。平成9年度より歯科衛生士増員に伴い、ブラッシング指導は歯科衛生士のみとなり、保健婦は保健指導に専念できる形となって現在に至っています。

美歯会事務の歩み

桜 田 昭 美

昭和26年3月の総会の役員改選で、父 桜田巳年二（昭和38年1月30日死去）が兄 桜田繁美（昭和29年8月29日死去）が卒業してくると言う事もあって専務理事の大役を仰せつかったように思います。

当時は、古き良き時代のこと、会の事務的な仕事と言えば会員への連絡と道歯・日歯に郵便振替で、負担金を送金するぐらいのものでした。

大きな事業としては、小学校・中学校児童生徒の口腔検診で、特に日本一児童数の多い三井美明小学校の約3,000人を筆頭に、小・中あわせて30校で約20,000人の審査日程の作成でした。

日程表の作成は、北野会長宅の2階で、学校名に人数を書いたカードを作り部屋一杯にならべカルタとりの要領で、高橋常保先生が算盤を片手に日数と人数を照らし合わせ乍ら何時間もかかる作業で、病弱な兄に代わり手伝ったのが私の美歯会事務仕事の始まりでした。

年度末となり、決算報告等をしなければならぬ時期をむかえ、前任者（今仲先生）のご指導を受けて悪戦苦闘の末どうにか総会に間に合ったのが、つい、この間のような気がしています。

当時、戦後5年が経過したとはいっても生活必需品等は、簡単に手に入らぬ時代の頃のこと、会には、絹ばりの無い古い騰写版（がり版・鉄筆）。特に毛筆原紙での報酬規定の印刷は、書道の先生にお願いして、今では考えられない苦労もありました。

登記関係等の書類は専門の司法書士にお願いしたので、タイプ印刷で、普通一般の書類は手書きによる謄写印刷で、それが昭和50年後半まで続きました。

その間、（コピラス）と言う印刷器が市販されましたが、液が直ぐに変色、印刷も不鮮明な事もあって短い期間しか使用できませんでした。

尚、当時の用紙は、現在とは違い勿論抗菌処理等されていない事もあって長い期間経つと変色しボロボロになるようです。

年を追うごとに、事務的仕事が多く手書き作業では、大変になったので初心者でも簡単に使える和文タイプを購入して、便利なものと感心しながら定款等夜遅くまでタイプ打ちをしたのは昭和60年の頃でした。

又、その頃、ワープロが一般家庭にも出回り始め、興味はありましたが「メカ」に弱い故もあって、なかなか挑戦出来ずにいましたが、札幌に在住の戦友から電話があり、最近

ワープロに凝り面白くて毎日徹夜しているから君も挑戦してみてはとの事。

以前に、稚内の戦友もワープロを購入したとの話を聞いていたので、彼に聞いてみて、彼が勧めるようであれば、購入しようと思い電話をしてみたところ買うには買って見たが性に合わず面白くないので宅急便で送るので、貰って欲しいとの返事で翌日早速送って来ました。勿論（新品・保証書付）でした。

年の故もあって、「メカ」に弱い私も現物が届いたので、挑戦せざるを得ない事となり説明書も読まずに、あちこち触れているうちに美唄と言う大きな文字が出たので、思わず出来たと言ったところ、家内がどのような操作をしたかと聞いたので、解らないけれど出来たと答えたら、それは出来たのではなくて、まぐれで、説明書を読んで説明のとおりの操作をして初めて出来た事になると言われてから、はや、13年。相も変わらずほんの一部を読み、最低限普段必要なことだけは、操作できるようになり大いに重宝しています。

特に、フロッピーは便利なものだと感心しています。

